**№6　テーマ『愛とは何か』**

**講話日2015年5月8日**

**皆さんこんにちは。本当に今日は初夏の陽気で暑いですね。今年２回目のお話なんですけど、今日のテーマは「愛とは何か」というテーマでお話をさせてもらいたいと思います。愛と言っても別に恋愛の話をするんではなくて、愛というのは原理的には人間と人間を結びつける、人間関係の力と言われておるわけであります。この愛の力ということは、男女、親子、兄弟、友情、師弟の愛などいろいろとあり、人間と人間を結びつける…そういう働きをする愛もあるわけであります。愛を心理学的に考えてみると、愛というのは自分のことよりも相手のこと、他人のことを優先して考えること、心情を愛と言うことができます。別の言葉で言うと他者中心的な心の働きと言うことができます。愛というのは自分のことよりも相手のこと、他人のことを優先して考えること、心情を愛と言うことができます。別の言葉で言うと他者中心的な心の働きであると心理学的に言えます。**

**あと愛というのは、自己犠牲的な行動も愛なんですよね。自己犠牲的とは、プラットフォームから線路に落ちた人を見かけたら、自分のことを顧みないで落ちた人を助けるという行動を自己犠牲的行動ということができるもんなんですよね。これも愛の働きなんですね。水に溺れて沈んでしまった人に対して、自分のことを考えないで助ける…この行為も自己犠牲的な行動と言います。また愛というのは、ある意味究極的な心情というのは、「この人のためなら死ねる」「この仕事のためなら死ねる」「国のためなら死ねる」とか、死ねるという心情が愛という心の働きの最も高まった状態と言うことができます。また、それ以上の愛はないと言えます。しかし、死んでは意味がない。だから、死ねるという気持ちで何かをする…これが愛の働きにおいて最高のものだと言うことができます。ですから仕事をしている人にとっては、「この仕事のためなら死ねる。死んでもいい」という状態に到達することが職業愛、職業人としての最も崇高な仕事への熱情と言うことができるわけであります。そういう意味では、愛というのは死ねるという心情であると言うことができるわけであります。**

**でまた、愛というのは信じようとする気持ちとか、あるいは人を許せるという気持ち、認めてあげようとする、あるいは分かってあげようとする気持ちなども愛の働きと言えることができます。心理学的には愛というのは人間に対する肯定的な心情とも言えます。また相手のために努力することも愛なんですね。愛の実践的な原理は努力と言えます。相手のために努力する気持ちがなくなったら愛がなくなった・失せたと言うことができる。相手のために努力する気持ちが少しでも残っていたらまだ愛は残っている、まだ愛はあると言うことができるわけであります。相手が自分のことをどの程度愛しているかを知ろうと思ったら、相手が自分のためにどの程度自己犠牲的努力をしてくれるかを見れば、相手がどの程度自分のことを愛しているかがわかる。逆に自分が相手のことをどの程度愛しているかを分かろうと思ったら、自分が相手のためにどの程度自己犠牲的努力をすることができるかを見れば、自分が相手のことをどの程度好きなのかがわかる。そういう判断もできるわけであります。愛の見極め方という観点から大事なものであります。愛は努力である。**

**そういう風に愛というのは昔から尊いものというか、非常に人間にとって大事なもの、一種憧れという気持ちを持って我々は意識しているわけですけど。残念ながら今はですね、至るところで人間関係が壊れてしまっている。これは離婚の激増、幼児虐待とか高齢者の虐待とか、あるいは宗教の違い、民族の違いで戦争になって人を殺す…こういったことが行われている。これが世界の現状であります。人間と人間を結びつける力、人間関係の力である愛というものが、世界的に衰退していると言うか、本当の愛が見失われてしまっているという状態にあると言っても過言ではない。こういう状況というものを人倫の崩壊と言います。人倫というのはの人間関係のこと。いろんな人間関係が至る所で寸断されて、壊れてしまっているのが現状であると言えます。そういう意味では今の時代は愛というものが衰弱している、衰退している。本当の愛が見失われてしまっているような状態である。であるがゆえに人間関係が壊れていくんだと言うことができるわけであります。**

**だけども、このままで放っておくわけにはいかない。どこかで離婚の激増も食い止めねばなりませんし、幼児への虐待も高齢者への虐待もなくさなければならない。戦争もなんとかして乗り越えていって、平和な世界を作っていく努力をしていかねばなりません。そういうことを考えるとなんで今人倫の崩壊なのか。なぜ今、世界的な規模で人間関係がどんどん壊れていく状況にいるのか？その原因をちゃんと考えてみる必要があるんですね。**

**これは会社において仕事をする上でも人間関係がうまくいっているかいないかは、ものすごく仕事の能率に関係する重要な要素であって、仕事で成功しよう、うまくいくためには、基本的には素晴らしい人間関係をつくる力が重要な課題になってくるわけであります。上司、同僚、部下との関係、お客様、取引先など、皆人間関係です。今よりもより素晴らしいものにしていく、良い人間関係をつくっていく、これは仕事をする上でも忘れてはならない努力目標、課題であります。**

**どうしたら素晴らしい人間関係をつくる力、いわゆる愛の実力を自分のものにすることができるか。すべての職業人が常に心していなければならない重要な問題であります。そのように考えるとまずはなんで人間関係が壊れていくのか、人倫の崩壊が起こっているのか、その原因を知る、捉える、見据えていないといけません。そうしないと、愛の実力を成長させ、愛の力、真実の愛を取り戻すことはできません。その意味でもなぜ今、人倫の崩壊という状況となっているかを考えていきたいと思います。**

**その原因として５つ考えることができます。**

**第１番目は、「権利を主張する民主主義社会」が人間関係を破壊する原因をつくっている…ということを考えてみてもらいたいと思います。**

**普通は民主主義社会は良い社会と思いがちですが、成り立ちをよくよく考えてみると、民主主義社会こそ人間関係を破壊する最も本質的な原因だと分かってくると思います。どういうことか？ 民主主義社会がどのようにして始まったかと言うと、中世の封建的な社会からどう脱却すべきかを考えるところから、新しい社会の在り方として生まれてきました。その経緯を考えてみると、そもそもなぜ脱却が難しかったかと言うと、身分や職業は生まれながらに天から与えられたものであって、王様という地位でさえも王権神授説というのが根強かったものですから、自分の身分や職業を勝手に変えるということも神の意志に反することだと考えられていたからです。皆が恐れていたという背景があります。だけども、内心は自由に職業を選択したい。身分に拘束されないで努力すればいくらでも地位が得られる状況にしたいという思いがあった。自由や平等を求める気持ちが高まっていた。だけども、宗教的な縛りがあり、神の怒りに触れることを恐れていた。中世の封建的な社会制度を壊せずに困っていました。その中で哲学者の方々がいろいろ考えて、「どうすればいったい封建的な社会から脱却ができるのか」と。職業や身分は神から与えられたものではなく、「人類が誕生したときは身分も職業の世襲もなかった。人間が歴史の中で人間自身がつくってきたものだ。自身がつくってきたものであれば、自由に変更しても構わない」と言い始めたわけであります。そして、「神から人間に与えられたものは、命しかない」と。生きる権利だけが与えられたものであると考えて、基本的人権と捉えました。それを原理にして新しい時代をつくっていこうという発想=民主主義がだんだんとでき始めていきます。民主主義社会というのはそういった背景から、権利を主張するという社会となっています。本当は権利には義務があるはずなのですが、義務を強く言うと、封建的な社会制度から抜け出せないものですから、とにかく生きる権利を強調して近代社会は始まりました。ですから、民主主義は義務は果たさなくても権利は生まれながらにあるんだ、という発想が近代社会にはあるわけであります。民主主義は義務は果たさなくても権利は生まれながらにあるんだと。自分に与えられている権利、生まれながらにある権利をお互いに主張し合って、バランスの取れたところでいろんなことを決めていこうと、法律をつくり契約をし、いろんなことをやっていこうと。イギリスの憲法にある権利の章典を元に民主主義社会は始まっていきました。とにかく、皆が権利を主張するという気持ちが強い。あまり義務は果たそうとしないのも特徴です。国家運営に必要な税金を皆で出し合っていくのが義務なのですが、だけどもほとんどの人が節税をする。あまり税金を出さぬように節税をする。ということは、あまり義務を果たそうとしないという傾向があります。権利ばかり主張しようとして、義務は果たそうとしない…できるだけ義務を果たさなくても良いようにと。そして挙げ句、節税から脱税になってしまう。**

**民主主義社会には権利と義務という社会規範がありますが、義務がどう使われているかと言うと、本来は相手のために何かをしなきゃならないことですが、現実は自分が相手のために何かをするということではなく、「俺に対する義務をキミは果たしていないではないか」と義務すら人を責めるために使う…法律なんかでも、そのように使われてしまっています。義務すら要求する。果たそうとせず、人を責める道具にする、そんな現実もあります。権利を主張し、義務を要求するという自己中心的な社会なんですね。だから、民主主義は個人主義とも言われ、社会の最小単位は個人だとも言われます。夫婦であっても親子であっても、個人というのが社会の最小単位ですので、個人としての自分の権利を主張するわけです。ですから、結果として対立が生まれる。お互いが権利を主張し合って、夫婦でも親子でも自分の権利を守ろうとする。そういう対立が生まれてくるわけであります。個人が最小単位だから家庭も崩壊し、夫婦の関係も兄弟の関係も崩壊してしまう。個が権利を主張することによって、それぞれの関係が崩壊していってしまう…それが民主主義社会の傾向であります。**

**権利を主張し合うということは、お互いに責め合うということになってきます。それで、お互いの権利を主張して一種の妥協点を模索して、釣り合いのとれたところでいろんなことを決めていこうということになりますので、民主主義社会とは契約社会とも言われています。さまざまな場面で契約書を交わして、それでやっていく契約社会。**

**契約とは、お互いの権利を主張し合って、落とし所・バランスの取れたところで進めていく。とにかく、権利を主張していくことは、お互いに責め合うということをしないと進んでいかない、動いていかない、機能しない社会なんだ、と。政治でも与党・野党が責め合う。経済も労使と経営陣が責め合う。裁判も検事と弁護士が責め合う。夫婦も夫と妻が責め合う。到るところで責め合うということをしていかないと、ことが動かない…そういう制度になっているのが民主主義社会であります。つまり、民主主義社会は対立という構造が生まれてしまう。これが人間関係を崩壊させる働きをしている意味であります。そういう意味でも、我々は民主主義社会が一番良い社会なんだと思っていてはならない。もっともっと素晴らしい社会とはなんなのかと考えて、模索していかなければならない時代に入っていきているというわけであります。今や時代は大転換期に差し掛かっており、近代から次へと大きく変えていこうという流れの中にあります。世界全体も西洋から東洋へ移り変わろうとしており、あらゆるものが原理的な変革が求められている。いつまでも民主主義社会が最も優れていると思っていてはならない。民主主義社会よりも素晴らしい社会とはどんなものなのかと考えていかなければならない。**

**民主主義社会は責め合う社会。不完全な人間がお互いに責め合ったら地獄。だから、責め合うのではなく、許し合って生きていく。許し合って生きていこう、許し合う=愛…という愛に基づく社会の在り方を模索して作っていかなければならないと言うことができるわけであります。とにかく、お互いに責め合うという構造を持つ社会を続けていくととことん人間関係が崩壊してしまう…どうすれば崩壊しない、素晴らしい社会を作れるのかを考えていかなければならない時代になってきています。そういう意味ではぜひ会社内でも責め合うのではなく、許し合って生きようと、そういう気持ちを強固に持って、会社の団結力としてもらいたいと思っているわけであります。責め合うのではなく、許し合うんだ。そういう美しい生き方を追求してもらいたいと思っています。責め合うは醜い、許し合うは美しい。そういう社会の在り方を根底から考え直していかなければならない時代になってきておりますので、我々の人間性そのものも責め合うような醜いものから、愛を原理に許し合う美しい人間性へ進化させて行かなければならない…そういう激変が人間性においても求められているというわけなんですね。１番目の原因は権利を主張する民主主義社会そのものにあるんだ、ということを意識しなければならない時代になってきました。**

**２番目は愛の理性化。**

**近代はずっと「人間の本質は理性だ」と考え、言われてきました。理性を成長させたら人間は成長するし、もっと良くなると考えられ、知育偏重の理性を成長させることを目標にした教育が行わてきました。社会も理性を原理にして合理化していったら良くなると思って、合理化を推進してきました。だけども、理性を原理にした社会をつくってきましたが、結果として自然破壊・環境破壊・人間性の崩壊という大きな問題が出てきてしまった。血の通った温かい心が失われてしまう…そういう状況から心遣い、思いやりができないような、能率本位のスピード重視の社会になってしまった。自然破壊・環境破壊・人間性の崩壊というのは、人間が理性を原理に生きてきたからがゆえに出てきた現象なんですね。そうなってようやく人類はこれからも理性を原理にして生きていって良いのか？と、反省をするようになりました。理性に対する盲信から目覚め始め、理性に対する絶対的信頼から揺るぎ始めているという状態にあります。**

**なんで理性を原理にすることが人間関係を崩壊することに繋がるのか。理性は、真理は１つと考えるものですので、考えがいろいろとある場合は決着をつけようとそれぞれが対立してしまう。また、理性は矛盾を排除する能力ですので自分と違う意見を否定してしまう。また、画一性を追求する。つまり、皆の考えを自分の考えにしてしまおうとする。自分と違う考えを認めない、許さないという気持ちになってしまう。そんな理性が社会を支配し始めると、違う考えの人、違う感じ方の人、価値観の違う人、宗教の違う人とは一緒にやっていけない、一緒に生活ができないとなってしまい、激しい対立が生まれてくるわけであります。人間が理性化されてしまうと愛も理性化されてしまう。そうなると、違う考えの人、違う感じ方の人、価値観の違う人、宗教の違う人とは一緒にやっていけない、一緒に生活ができないとなってしまう。愛すら理性化してしまうと、同じ考え方、感じ方、価値観…の人しか愛せない、一緒にやっていけないとなってしまう。それはすなわち、自分しか愛せないのと同じ。つまり、自分しか愛せない人。それは偽物の愛。なぜなら、愛とは種族保存の欲求を原理にして生まれてきた心情であります。種族保存とは男が女を、女が男をという他者を愛する、そういう関係性から生まれてきたわけであります。自分しか愛せないのは偽物の愛だ。それでどうして子孫が残せようか。同じ考え方、感じ方、価値観…の人しか愛せない、一緒にやっていけないとなってしまう。それはすなわち、自分しか愛せないのと同じ。それは偽物の愛だ。それを皆さんにもよく考えてもらいたいと思います。しかし、ほとんどの人が理性によって支配され、理性化された愛、歪められた愛を愛だと思って生きているのが現状であります。同じ考え方、感じ方、価値観…の人としか一緒に仕事ができない、一緒にやっていけない…そうやって悩んで、苦しんでいる。多くの人が愛に悩み、愛に苦しんでいる。その大きな原因が愛の理性化である。同じ考え方、感じ方、価値観…の人しか愛せない、一緒にやっていけない。理性化された愛の姿であります。こういう愛が自分の中にあったとしたら、その人は自分しか愛せない人間なんだ。他人を愛せない、自分しか愛せない。それは偽物の愛だ。このことをよく反省しなければなりません。**

**なかなか考え方の違う人と一緒にやっていくのは難しいし、価値観の違う人と一緒に仕事をするのは難しいことであります。現実的に宗教が違ったら殺し合ってもいます。どうしたらそういうことをなくせるのか？ そのことを真剣に考えなければいけない時代になってきております。**

**では、どうしたら考え方の違う人と一緒にやっていけるのか？**

**考え方が違うと対立が生まれてくる。考え方、感じ方、価値観が違い、宗教が違う人と一緒に仲良くするにはどうすれば良いか。そのためにはまず対立はなぜ生まれるかを考え、対立とはなんなのかを知る必要があります。なぜ、我々は対立をし続けてはいけないのか。なぜ、対立や戦争や殺し合いは駄目なのか。その根拠はなんなのか。人間の命の根源から湧き上がってくる欲求は、できることなら皆と仲良く信じ合って生きていきたい。これは命の欲求なんですよ。どんな人の命からも湧いてくる欲求は、できることなら皆と仲良く信じ合って生きていきたい…。なぜ、そういう欲求が命から湧いてくるのか。**

**人間を作ったのは人間ではなく、母なる宇宙の摂理の力です。宇宙の摂理の力によってこの地球に人間は誕生しました。その命から皆と仲良くやっていきたいという気持ちが湧き上がってくる、そういう欲求が湧いてくるというのはどういうことかと言うと、命をつくった母なる宇宙からするならば、自分の産んだ子どもたちが殺し合ったり、憎しみ合ったり、対立していては、お母さんなら悲しい…お母さんなら自分の産んだ子どもたちが仲良く信じ合って生きていってもらいたいと願うはずなんですよ。**

**そのように考えたら、自分の命から湧いてくる「できることなら皆と仲良くしたい」という心情は、実は命を産んだ母なる宇宙の願いであり、祈りなんです。それで人間というのは、母なる宇宙によって生み出された命を生きている訳ですから、人間らしく生きる根本は、命の根源から湧いてくる母なる宇宙の願いであり祈りである。できることなら皆と仲良く生きていってねというお母さんの願いをどうしたら実現することができるか、これを考えて生きるというのが人間らしく生きるということの原点なんですね。そこから人間らしく生きるということが始まります。人間らしく生きるということは、できることなら皆と仲良くしたい…では、どうしたら良いのだろう？というのが人間らしく生きる根本なんですね。**

**仲良く生きるというのは、人間を超えた母なる宇宙の、命を産んだ母なる宇宙の願いであり、祈りであり、思いなんだ。であるがゆえに、子である人間は母なる宇宙の思いを裏切ってはいけない、背いてはならない。思いを引き受けて、いろいろと考えてやっていく。これが人間らしく生きる基本なんです。だから、人間は殺し合ってはならない。対立し続けてはならない。戦争なんかいつまでもやっていてはならない。それは母なる宇宙を裏切ることになるんだ。だから我々は平和を求め続けていかなければならないという必然性が人間の命にはあるわけであります。**

**では、どうしたら我々は皆と仲良く平和に生きていくという生き方をすることができるのか。それを考えるためには、なんで対立が生まれてくるのかの原因をちゃんと考えてみる必要があるわけであります。考え方の違いに基づいて対立が生まれてくるということが多いわけでありますけど、考え方の違いはなぜできてくるのか。その原因を考えてみると、考え方が違うという状況になる原因は、５つあります。**

**体験が違うと考え方が違うんですね。経験が違うと考え方が違ってくる。体験と経験は英語で言うと両方共エクスペリエンスです。しかし、日本語で言うと、次元が違うんですね。体験というのは、自分の肉体が外の世界と関わった事実のこと。経験というのは、体験から何を学んだか。経験内容というのは自分の意識の中の出来事であって、体験というのは自分の肉体が外の世界と関わった事実のこと。経験は意識の中の出来事である。だから、次元が違うんですね。この２つは別にしないといけない。同じことを体験してもその人の人間性や能力の水準によって、体験から学び取るものは皆違うんですね。だから、同じことを体験しても経験の違いによって感じ方が違う。体験の違い、経験の違い…。**

**第３番目は、知識情報。持っている知識情報が違ってくれば、考え方にも違いが出てきます。知識、情報の違いも考え方の違いをつくり出す。第４番目は物事の解釈の仕方。理解の仕方、解釈の仕方が違ってくれば考え方も違ってくる。最後の第５番目は、人生のさまざまな出会いの違い。どんな事件と出会ったか、どんな災害と出会ったか、どんな事故と出会ったか、どんな本と出会ったか、どんな人間と出会ったか。この人生のなかでのさまざまな出会いの違いも人間の考え方の違いをつくり出す大きな原因であります。すなわち考え方が違うという結果は、何によってもたらされるかと言ったら、体験・経験・知識情報・解釈・出会いの５つの違いからつくり出されます。つまり、考え方が違うということは、相手が自分とは違う体験をしているんだ。相手が自分とは違う経験をしているんだ。相手が自分にはない知識情報を持っているんだ。相手が自分とは違う物事の理解・解釈の仕方をしているんだ。相手が自分とは違う犯罪や事故、事件、人間、本と出会っているんだ…このことによって、人間の考え方や価値観が変わってきます。**

**そこで仲良く生きていくために考えなくてはいけないことは、同じ考え方の人間と一緒にいたら楽しいし、愉快で気楽だけど成長はしない。人間、成長しようと思ったら、自分にないものを持っている人間と付き合って、自分にないものを相手から学ばないといけない。同じ考え方・価値観であれば、持っているものは似通っているため成長は見込めない。成長しようと思ったら、自分にないものを持っている人間と付き合って、自分にないものを相手から学ばないといけないということです。**

**そのことを考えると、今対立して「嫌なやつだ」「敵だ」と思っている相手は、自分にはない体験・経験・知識情報を持っているからなんですね。人間は成長しようと思ったら、自分にないものを相手から学ばないといけない。対立という状況が出てきたらまず我々はどういう気持ちにならないといけないかと言ったら、「一体あいつは俺にない何を持っているんだ？」、「俺は一体あいつから何を学んだら良いんだろう」そういう気持ちになるということが対立という心情から抜け出していくという大事な出発点なんですね。対立=自分にないものを持っている人間が今目の前にいると教えてくれているということなんです。それができなかったら、永久に対立を乗り越えられません。対立から抜け出すことはできません。このように対立を理解することによって、乗り越える力を持つことができます。**

**対立から逃げないで、対立に向かっていく…「一体あいつは俺にない何を持っているんだ？」、「俺は一体あいつから何を学んだら良いんだろう」そのように考えて、具体的には、「あなたと私は考え方が違いますよね、どうしてあなたはそういう考え方をするようになったのか、知りたいです。教えてください」と聞き、理由を話してもらう。それだけで相手を敵だと思う気持ちや目つきは消えてしまう。相手から学ぼうという目つきに変わりますから。それだけで対立心は消える。顔も相手を嫌なやつだと思って見てる顔ではなくなってくる。自分の心が変わっていくと、自分の顔つきも目つきも変わっていく。相手から学ぼうという心持ちだと目が変わる。その目の色の変化に相手も感動して、こちらに対する態度を変えてくれる。そういう状況がつくられていきます。人間関係は目で変わる。どのような目で見るかでその人との人間関係が決定的に変わってしまう。**

**相手を見下げるような、相手を軽蔑するような、相手を非難するような、そんな目で相手を見ては人間関係はもう修復できません。相手を尊敬するような、相手を信じるような、相手を好ましいというような目で相手を見れば、相手もその目に感動して自分に対する態度を変えてくれる。ゆえに人間関係は目で決まる。どういう目でその人・お客さんと向き合っているか。ちょっとでも相手に対して不信があると、敏感に相手はそれを感じ取って、こちらに対する信頼を相手はなくしてしまいます。**

**微妙な目の色の変化が相手の気持ちも変えてしまって、相手の気持ちも動かして、人間関係は変わっていく、つくられていく。人間関係は目が勝負だということをぜひ分かっていてもらいたい。**

**対立の状況にあっても、相手に勝とうとか、「嫌なやつだ、敵だ」と見るのではなくて、「この人から俺は何を学んだら良いのだろう」、「この人は俺にない何を持っているんだろう」という“知りたい”という認識欲を持って相手と接する。そのためにいろいろと相手に質問をして、「あぁ、なるほど。そうなんですね」といろいろと話してもらって、最終的に「なるほど！ よく分かりました。そういう考えだったんですね」と返したら、もう相手はこちらを睨んでいない。もう自分のことは分かってもらったと思って、安心感で心を開いてこちらに接してくれる。そのようにして人間関係は修復されていくんですね。お互いにそのようにして相手から学んでいく。お互いがお互いに理解できて、分かり合って、考え方や価値観が違っても、分かり合えば協力できるんです。パートナーシップが組めるんです。同じものを持っているのではパートナーシップは組めません。それは仲間ですから。パートナーというのは、違うものを持っているからパートナー、助け合える。相手の足らないところは俺が補う。俺の足らないところは相手が補う、そういう助け合い、それがパートナーシップ。そのようにして我々は考え方や価値観、宗教が違ってもお互いに分かり合って、認め合って、知っていく…そうして対立から抜け出して、協力して、一緒に何かをしていく…そういう道が拓けていくことになるわけです。**

**これが対立を乗り越える実力というものなんですね。言い換えると、愛の実力なんですね。そういう風にして我々は理性によってつくられた醜い対立心・敵対心というものを乗り越えていくことができるんですね。**

**まず対立が出てきたら何をするか。「一体あいつは俺にない何を持っているんだ？」、「俺は一体あいつから何を学んだら良いんだろう」と考えること。それだけで相手を見る目の色が変わってくる。この目の色の変化が相手の心情を動かして、対立を乗り越えさせてくれる。相手は目の色の変化に感動するんです。前とは違う意識で付き合ってくれる。目の色を変える…そのためには、心を変えなくてはいけない。心を変えるためには意識変化が必要。意識が変わらないと心は変わらない。心が変わらないと目の色を変えられない。そのためには、自分の意識を成長させることが非常に大事な勉強になります。いろんなことを知ると、その新しく知ったことによって自分の意識が変わってきます。そのようにして我々は、理性化され理性の奴隷となってしまった愛を修復して、愛の本質を取り戻すような生き方をすることができることになります。ぜひこの対立を乗り越える方法を理解しておいてもらいたいです。人間関係が壊れていく第２番目の原因は、愛の理性化ということでした。同じ考え方の人間としかやっていけないという人間は、自分しか愛せない人間なんだ。自分しか愛せない愛は偽物の愛だ。自分しか愛せない愛でどうして子孫が残せようか。こういう愛の現状に対する原理的批判をちゃんと理解しておいてもらいたいです。**

**次は第３番目の原因です。愛が文化になっていない。愛は、昔から情緒・感情・本能・情熱と言われ、自然発生的なものとして考えられてきました。また、人間は文化をつくる動物とも言われています。人間が人生を生きていくためには、自然のなかで生きるということはできません。自分がつくった歴史と文明と文化のなかで生きるということが必要で、生きる環境なんです。人間が人間的な人生を歩んでいこうと思ったら、文化をつくるという働きが非常に重要になります。だけども、愛というのは文化になっていない。愛は自然発生的な情緒・感情・本能・情熱という状況でずっと放置されてしまっている。その結果として人間は感情に振り回されてしまって、愛に悩み、苦しむという状況にあるわけであります。愛を文化たらしめないと、愛を人生を生きる力に変えていくことができない。愛を文化にすることによって初めて人間が人生を生きる力となる。愛の力によっていろんなことを乗り越え、解決していって人生を生きていく力がつくられていく。**

**文化（カルチャー）というのは、自然に存在するものを自然のまま放っておくのではなく、それよりも人間が手を加えて、より素晴らしいものにしていくということなんです。文化の根源が農業と言われております。農業はアグリカルチャーと言われ、職業のなかで文化（カルチャー）というワードが入っているのは農業だけ。アグリはF1レーサーの名前ではなく、土地を意味しています。カルチャーはラテン語で言うとクルタスとされ、耕すという意味になります。農業とは土地を耕すということが語源となっています。これを出発点として文化が始まりました。自然に存在する稲を放っておくのではなく、改良を加え、たくさん収穫できるようにし、病虫害・災害に強いものにしていきました。いろんな工夫を付け加えながら、今日の美味しい米がつくられていきました。そのように文化がつくられていきました。このように、自然に存在するものを自然のまま放っておくのではなく、それよりも人間が手を加えて、より素晴らしいものにしていく…それが文化ということなんです。**

**愛というものも自然発生的な状況として放置しておくのではなくて、人間が手を加えて自然に存在する愛よりももっと素晴らしい愛にしていこうと努力することで、愛の文化が生まれてくるわけであります。愛を文化足らしめなければ、愛を人間が人生を生きる力に変えていくことができない。だけどまだ愛は文化になっていない。だから人間は愛というものを尊いものと思いながらも、文化になっていないから愛を人生を生きる力にできなくて、多くの人が愛に迷い苦しむという状況にあるわけであります。いわゆる自然発生的なさまざまな愛の心情・感情に振り回されて、そして愛というものを人生を生き抜いていく力というものにできていないのが人類の現状です。愛はまだ文化になっていない。これも我々が愛に悩んで、人間関係が壊れていってしまう原因となっています。**

**第４番目は、愛が学問として研究されていない。まだ学問の研究対象になったことがない。愛は理屈を超えたものだとか、理屈抜きのものだと言われてきた。ゆえに愛は、理屈でものを考える・理性によってものを考える学問の研究対象にはならないと考えられ、ずっと排除されてきました。愛はもっぱら文学のテーマだったんですね。文学の中では愛はさまざまな形で語られ、今や新しく語られることはないだろうと言えるくらい、古くからいろいろな愛の在り方が語られ尽くされてきました。語られれば語られるほど、愛のバリエーションが増えれば増えるほど、人類は愛に悩むことになる。いろいろあるからどれが良いのかわからない。なかなか自分で判断できなくて、愛のさまざまな在り方に振り回されて、かえって迷ってしまう。**

**最後の第５番目は、愛を能力と考えられていない。愛は情緒・感情と考えられて、理性と同じように能力と考えるという発想がまだ人類にはないんですね。そう考える人は誰もいない。だけど、愛を能力と考えないと、愛を成長・発展させることができません。愛を理性と同じように能力と考えて、それを成長させると考えないと“愛の実力”という人生を生きる力にしていくことができません。これらをしっかりと考え、新しい愛の在り方に着目していく必要があります。**

**人間関係がどんどん壊れていってしまう原因はなんなのかと言ったら、今申し上げた５つのことが課題として浮かび上がってきます。これらの原因を考えながら、我々はどのようにして理性化された愛を理性の支配から救い出して、どのようにして愛本来の在り方を取り戻していったら良いかを改めて考えていかなければなりません。まずは学問化されていない愛をどうしたら学問となるかを考えて、愛の本質と理念を明らかにしていくことに挑戦しないと本当の在り方を取り戻すことができません。愛の本質と理念を明らかにすることで、自信を持って愛に関わっていけて、愛を自分が人生を生きる力に変えていって、能力としてつくっていけるという成長をしていけます。**

**学問というのは、基本的に時間・空間という枠組みを使って物事を考えるシステム・方法論なんですね。愛の本質はなんなのかを学問的に考えるとしたら、まず愛における空間論的本質・時間論的本質とはなんなのかから考えなければなりません。それぞれがわかったのなら、双方を統合してガッチャマンして、人間においての愛の本質はこうだと言うことができる…そういう流れが愛を学問的に考える体系なんですね。**

**レジメの３番目に「愛の空間論本質」と書いてありますが、正しくは「愛の空間論的本質」です。**

**まず、愛を空間論的に考えるとはどういうことなのか。空間というのは、いろいろなものが横の関係で有機的に結びついていることを空間世界と言います。その空間の考え方を愛に置き換えたらどうなるか。愛は人間と人間を結びつける力と考えることが、空間論的に考えることの入口、出発点となります。ここから、愛は人間関係の力であるとも言えます。人間関係の全体は、社会だ。社会とは、現実的空間である。社会とはなんなのかを考えていくことによって、我々は愛における空間論的本質に到達することができるであろう。こういう流れ・考え方・論理をロジックと言います。**

**理性の使い方には２つあって、科学（サイエンス）はセオリーという理性の使い方をするんですが、哲学はロジック、論理として理性を使います。セオリーとロジックの違いとは。セオリーは、数学的合理性と因果率を基本にして物事を考えていくこと。ロジックは、言葉を使って物事の意味を連鎖させていく、連関させていくことによって、最終的な結論を導き出すという方法のことです。科学は数字を使い、哲学は言葉を使う。哲学的に考えるとはどういうことか、これは具体的に私が今まで話していることによってわかってもらいたいのですが、少し説明します。**

**愛を空間論的に考えていくと、愛は人間と人間を結びつける力が出発点となる。ここからどう進むかというと→だから愛は人間関係の力→人間関係の全体は社会→社会とは現実的空間である→だから社会とはなんなのかを考えていくことによって、愛における空間論的本質に到達することができるであろうとなります。**

**では、社会とは。社会にはいろんな性格・考え方・価値観・宗教の人がいる、社会とはそういうものだ。社会の中で生きるというのは、いろんな性格・考え方・価値観・宗教の人と共に生きること。この社会の現実の中で人間に求められるものを社会性と言う。人間は社会的存在だから社会性が必要だと言われる。では、社会性とはなんなのか。いろんな性格・考え方・価値観・宗教・民族の人と一緒にやっていけること、共に生きる力。社会で生きる人間に求められるのが社会性であるならば、人間は社会的存在だから社会性を持つことによって、人間は人間らしく生きる人間性を獲得することができる。いろんな性格・考え方・価値観・宗教の人と共に生きられないという人は、人間性が貧しいということ。これらが愛を空間論的に考えた場合の結論となります。すなわち愛における空間論的本質とは、考え方の違う人と生きる力、社会性だと。そのように結論が出ます。**

**考え方の違う人と生きる力を矛盾を生きる力とも言います。理性は矛盾を排除します。理性では考え方の違う人とは生きられません。愛は違います。愛は理性・理屈を超える力ですから。愛こそ、性格・考え方・価値観・宗教の違う人と生きる力=矛盾を生きる力なんだ。これから人類に最も緊急に求められる力であります。理性は矛盾を排除しますから、理性で生きたら性格・考え方・価値観・宗教の違う人は敵となってしまいます。宗教が違うことで殺し合い、戦争にもなっています。**

**愛とは男と女が愛し合う世界だ。違うという、矛盾を認めなければ愛は成り立たない。男と女が愛し合うことは、お互いに違うものが愛し合うということ。矛盾を生きる世界が愛だ。性格・考え方・価値観・宗教が違っても一緒に生きようとする愛の力なしには、離婚の激増を食い止めることはできません。幼児への虐待も防げない。幼児への虐待とは、子どもが親の言うことを聞かないと親がムカついて、なんとか言うことを聞かそうとして体罰をしたりすることによって、虐待が生じてきますよね。親に従順な子をつくろうとする在り方は親の愛ではない、明らかに支配・強制です。**

**それはなぜか。子どもというのはなんのために生まれてくるのか。子どもは皆、新しい時代をつくるために生まれてくる。新しい時代をつくろうとしたら、いつまでも親・大人の言うことを聞いていたのではいかんのだ。大人が「こうしなさい」と言ったら、「自分はそうしたくない」と言うのが新しい時代をつくっていく子どもの欲求なんですね。子どもの命には生まれながらにして第一反抗期、第二反抗期という反抗しながら成長していく、反抗しながら成長する生育のプロセスがインプットされています。ちゃんとそのようにプログラミングされて生まれてくるのが、子どもの命であります。子どもは親・先生・大人に反抗し、自分になるんですね。反抗しなかったら自分というのはできないんですよね。それが人間の真実の命なんだ。反抗しないでいつまでも素直で従順であったのでは、歴史をつくるために・新しい時代をつくるために生まれてきた命を生かせない。古いものに支配されたままで死んでしまう。命を知った本当の親の愛というものは、子どもの反抗を許さなければならない・恐れてはならない。子どもに反抗させながら、その子らしく形づくってあげるのが親の愛の教育の真実であります。**

**教育というのは、教えると育てるの漢字があって、教育と言います。教えることも大事だけれど、育てることも大事。基本的には育てるために教える…それを見失ってはならない。すなわち教育というのは、「教」が「育」を超えてはならない。教え過ぎたらその子をつぶす。教え過ぎたら従順で素直な人間をつくってしまう。教え過ぎたらその子の本当の姿を見失わせて、その子をつぶすことになる。個性を奪い取ることになる。本当の教育とは「教」が「育」を超えてはならない。**

**だけど、親の子に対する虐待というのは、まさに奴隷の如き子どもを求めているという親の在り方であります。自分の言うことを聞かない子は憎たらしいという思いが親にある。どうして親にそんな気持ちが芽生えるのか、これは民主主義だからですよ。自己を主張する、自分を主張する、自分を相手に飲み込ませたい…そんな自己中心的な自己主張が民主主義の根本にある。人間、自分の言うことを聞かない者は憎たらしいんですよね。子どもが反抗をしたら、その子が何を求めていて、何を考えているのか、そのことをわかってあげて、その子の欲求や考え方に応じた対応をして、その子らしく成長させてあげる。それこそ、本当の人間教育の姿であります。とにかく、反抗しなかったらその子はその子らしくなれないんだということをわかっていないと、親は子どもに対する接し方を間違ってしまいます。躾も大事だ、教えることも大事だ、でも従順で素直な子を求めたら、それは子ども殺しだ。むしろ積極的に反抗を許して認めながら、その子のことをわかってあげるのが、理屈抜きの親の愛であります。理性化された親は、どうしても画一的で従順な子を求めがち。子どもの反抗を抑えて、虐待してしまう…。これは明らかに間違った愛の在り方であります。**

**愛というのは他者中心的な心の働きなんだ。自分のことより相手のことを優先させる気持ちが愛だ、思いやりだ、心遣いだ。理性的になってしまうと愛すら押しつけになってしまうんですね。自分の愛を相手に押し付けて、「これが愛だ」と相手に受け入れさせようとする。愛の強制、身勝手な愛、愛しているつもりの愛、これがものすごく多い。今、夫婦や親子の間にも一般的な人間関係においても、愛しているつもりの愛、相手のことを考えてあげているつもりの愛が多い。それは自己中心的な愛なんですね。相手にとってはして欲しくないものでも、「これが愛だ」と受け入れさせようとする。親は子どもを愛していると言っているが、子どもの方からしたら「お父さん・お母さんは全然俺のことはわかっていない」と、言いたくなるような愛を親は子どもに対してぶつけています。**

**お父さんの愛は家族を縛る、家族は全然愛を感じていない。「そんなことして欲しくない」ということを家族に対してやってしまっている。そういう自己中心的な身勝手な愛、愛しているつもりの愛が非常に多い。これは理性的な愛。愛が人を縛る。相手に自由を許さない。**

**今は愛の原点に立ち返って、もう一度よく考えてみないといけない時代に入ってきているわけです。そういうことをしないと、離婚の激増はおさまらないし、幼児への虐待を防げない。愛というものを哲学的に考えていくと、愛は矛盾を生きる力だとわかってきます。愛の空間論的な本質は、他者と生きる力である。他者とは性格・考え方・価値観・宗教の違う人。それが理屈を超えた愛の本質なんだ。それを別の言葉で言うと、社会性がある。宗教・民族が違うからといって戦争をしている人は社会性がないんです。考え方・価値観が違うからといって一緒に仕事をしたくない、対立している人は社会性がないんです。人間が社会的存在であるとするならば、社会性がないということは人間性がないんだ。人間性がないということは人間ではない。人間ではないから人が殺せるんだ。そういう理屈になる。**

**人間性がないから相手が死ぬまでいじめができる。**

**国連などで各国の代表者が集まって、社会・社会性とは何かを議論してもらったらより良くなるはず。宗教戦争をしているということは社会性がないんだ。社会性がないということは人間性がないんだ。人間性がないということは人間ではないんだ。そういうことがわかってきますから、それだけでもわかったら恥ずかしくて宗教戦争なんてやっていられないとなるはずなんですよね。愛というものを哲学的に考えていくと、愛は矛盾を生きる力だとわかってきます。愛の空間論的な本質は、他者と生きる力である、社会性だとわかれば、宗教戦争をしている自分たちが人間ではないということを行動によって証明していることになってしまいます。だから、恥ずかしくていつまでもやっていられるかと。これだけでも物凄く大きな戦争への抑止力となりますよね。それがわかっただけでも。残念ながらまだまだ多くの人が愛の哲学的本質に気付いていない。愛が矛盾を生きる力だと、愛が性格・考え方・価値観・宗教の違う人と共に生きる力だと。同じ性格・考え方・価値観・宗教の人と生きていったら良いというのなら愛は不要、理性で十分。なぜ愛が必要なのか。それは性格・考え方・価値観・宗教の違う人がいて、共に現実を生きていかなければならないから。だから、理屈を超えた愛が必要なんだ。だから、矛盾を生きる力=愛が必要なんだ。この愛の本質をしっかりと自覚して、自分の人生を幸せなものにしていかなければならない。**

**そうすれば離婚の激増はおさまる。幸せな夫婦が徐々に増えていくはずです。そもそも夫婦とは考え方の違う者同士。生育過程が異なる場合は、考え方が違って当然。一緒に生活をし始めたら、結婚するまでの生育過程の違いがどんどん目に付いてくる。だけども、一緒に生きていかなければならないのが夫婦なんだ。他者と生きる力なしに夫婦なんてやってられませんよね。夫婦円満の秘訣は、違うということ、自分には無い体験・経験・知識・情報・解釈・出会いを持っているんだと知ること。自分が成長するためには、相手から学ばなければならない。お互いが相手から自分に無いものを学ぼうとすることによって、夫婦はお互いがわかって理解できて、パートナーシップを組んで共に生きていける。その力が愛の実力。もっともっと夫婦はお互いに結婚してから学び合って、成長していこうとする意欲が無かったら、夫婦は付き合っていけませんよね。お互いを学び合って、知り合うことによって初めて分かり合って生きていけることになるので。学ぼうという気がなかったら自分のことを相手に押し付けるだけですから、これは喧嘩になりますよ。愛するとは、学び合うことなんだ、教え合うことなんだ。**

**会社内部でも対立する人間がいたのならば、お互いに学び合って教え合って、分かり合って助け合ってという状況に変えていく。そういう付き合い方が会社の人間関係において大事になってきます。愛するとは学ぶことだ。自分をもっともっと成長させようという気持ちがないから、相手から学べなくて「自分のことをわかってよ」と言うだけで、それを相手に押し付けるだけでは、対立や喧嘩になってしまう。自分のことを押し付けるんじゃなくて、相手のことを学んで、相手のことをわかって、自分のことをわかってもらう努力をする。お互いに結婚してから成長していくということをもっともっとはっきりとした目標に据えて、付き合っていかないと夫婦はうまくやっていけません。夫婦はもちろん、すべての人間関係に言える付き合い方なんですね。**

**成長するためには自分に無いものを相手から学び取らないといけない。もし対立という状況になったら、自分は相手から何を学んだらいいんだろうという思いを持たなきゃならないし、一体相手は自分にない何を持ってるんだろうと。それをよく知りたいという気持ちも愛なんですよね。愛するとは学ぶこと。相手のことをもっともっと知りたいという気持ち。お互いがもっともっと人間として成長したいという気持ちがなかったら、夫婦はやっていけません。成長するためには相手のことを勉強しないといけない。相手のことを学ばなければならない。その努力が愛。**

**ぜひこの愛の実力を自分のものにしていく努力を考えてもらいたいと思います。**

**それでは、後半の話に入ります。**

**愛の時間論的本質ですね。先ほどは空間論的本質をお話ししたんですが、空間論的本質は他者と共に生きる力、矛盾を生きる力と申しました。今度は時間論的な観点から愛の本質を考えていく。時間論的とは、どういう時間的経過を辿って愛が出てきたのかを背景にして、愛とは何かを考えていくことなんですね。その愛の出発点は種族保存の欲求というものが命に現れて出てから。種族保存の欲求から直接的に出てくるものは愛ではなく恋。恋は男と女を結びつけて、子孫を残させようという心情が恋。**

**最終的に生殖活動が目的になっているわけですね。愛には、男女・親子・夫婦・兄弟・師弟・友情・国・仕事に向けたものも含まれます。愛は必ずしも生殖活動を前提とするものではない。愛は恋よりも、より精神的に純化された世界だと言わなければならない。純とは純粋の純。恋と愛との違いを考えることを通して、愛とはなんなのかを定義していきます。**

**まずは、恋とはなんなのかを考えると、男と女が好きになるという心情から出てきます。ただ、好きだ嫌いだと言っている段階では、まだ恋ではありません。好きだというところから始まるわけですけど、だんだんと好きだというものから相手を恋しいという心情に変わり始める。恋しいという心情に入る段階から恋が始まります。恋しいとは、好きになった人を自分のものにしたい。人にはあげたくない。これが恋。相手が自分とは違う他人に気を取られていると嫉妬する心情も恋なんです。恋しいという心情が進んでいくと、やがて「あばたもえくぼ」という段階に入る。さらに進むと相手を理想化していく。これが出てくると、痘痕すらもえくぼに見えてしまうほどに。短所すら長所に見えてしまう。「こんなに素晴らしい人はいない」という思い込みがだんだんと出てくるわけです。進み切ると、最終的には恋は盲目と言われる段階に入る。**

**自分の中で勝手に理想化してつくり上げた相手の理想像というものを通して、相手を見ることになりますので相手の現実がどうであれ、とにかくすごい・すばらしい・かっこいい人に見えてしまう…恋は盲目という状態であります。なんで恋をすると最終的に恋は盲目という状態になって、本当の相手の姿が見えないという状態になってしまうのか。相手の本当の姿が見えていたら、誰も結婚したいと思わないんですね。どうしても結婚させないと子孫を残すことができませんからね。結婚させようと思ったら、相手の本当の姿を見えないようにしてしまわないとならない。そうしないと結婚する気にならないから。必然的に恋は盲目になっていきます。「この人と一生一緒にいたい」という恐ろしいことを思うわけです。**

**それで結婚をする。で、結婚をすると大体ひとつ屋根の下で生活をするわけです。そうすると、恋しい恋しいという心情がしぼんでくる。実は恋しいという心情は離れていて初めて思う気持ちなんです。一緒に暮らし始めると同時に恋しいという心情はしぼんでくる。そうすると、相手を理想化する心情もしぼんでくる…そうすると、日を追う毎に相手の持っている短所・欠点が目に付いてくる。「なんでこんなのと一緒になっちゃったんだろう」と思って、反省したり。だんだんと熱が冷めてくる。やがて、痘痕は痘痕に見え、えくぼはえくぼに見えるという正気に戻る。正気になったところから、愛が始まるんですよ。**

**結婚というのは、人生の墓場ではない。結婚は恋の墓場、愛の始まりなんですね。普通は恋と愛をそんなに厳密に区別して意識していなくて、恋愛と言ってしまって、恋も愛も一緒くたでゴチャゴチャになってます。実際、恋と愛は相当オーバーラップする部分が多いですから、多くの人の場合は恋の終わりが愛の終わりになってしまっている。恋しい恋しいがなくなったら愛は終わりとなってしまって、別れてしまう。それでは、本当の愛を育むことができません。本当の愛を成長させていくためには、どうしても恋と愛を峻別して、愛とは何かを考えていかないといけません。**

**人間を愛するということは、恋しているときのように完全無欠のロックンローラーを愛するようなものではないんですね。人間を愛するということは、不完全な存在を愛するということなんです。恋は相手を理想化していくこと。愛は相手を完璧で欠点のない人だと思うことではなく、不完全な存在を愛するということ。不完全な存在=人間は誰しも長所半分短所半分。人間を愛するということは、長所も短所も愛するということ。長所は愛せても短所は愛せないという人は、人間を人間として愛する資格がない。人間を愛そうと思ったらどうしてもその人の短所も引き受けて愛することが必要。短所も愛するという力をつくっていかないと人間を愛することはできません。長所は愛せても短所は愛せないという人は、神しか愛せない。人間は長所半分短所半分という構造で人間性が成り立っている。人を愛することは、その人の長所も短所も丸抱えで引き受けること。**

**なぜ、人間は長所半分短所半分という構造なのか。その根拠は、人間も大宇宙を形成する一個の存在である。人間も大宇宙の一部分なんですね。我々も宇宙なんですよ。宇宙は我々の外にあるんじゃない。我々自身が宇宙の一部分を占めている。我々一人ひとりが大宇宙の一部分なんだ。では、宇宙とはなんなのか。宇宙とはプラスとマイナスのエネルギーが半分ずつあって、エネルギーバランスを模索しながら宇宙の秩序、ハーモニーをつくっています。これが宇宙の摂理と言われる現象であります。これらを用いて宇宙は万物をクリエイトしています。つまり、宇宙の中にあるすべてのものの在り方は、バランス作用・平衡作用・調和作用によって保たれています。宇宙の中にある星がなぜだんだんと丸くなろうとするのか、それは３次元空間の中で完全なバランスを追求すると球体になるからです。これが星が丸くなろうとする傾向性を証明する理由であります。**

**バランスを取ろうと思ったら、相反する・対立するものが必要。それらが協力し合いながら働くことによって、バランスは保たれる。宇宙もプラスとマイナスのエネルギーが半分ずつあって、それが協力し合いながら秩序をつくっているわけです。そういう力で万物はできています。基本的に宇宙は対存在といって、相異なるものが一対となって成り立っている。プラスとマイナス、光と影、陰と陽、善と悪、表と裏、男と女、動物と植物…すべて半分ずつ。構造的に約半分で成り立っているのが、宇宙の摂理の働きなんです。**

**人間も宇宙の摂理によってつくられた形と構造ですので、長所と短所が半分ずつあると考えなくてはならない。これは宇宙の摂理から人間を考えた場合の認識であります。どんな立派な人間でも奥さんに聞いたら「あんな人…」となっちゃうんですよね。世間からは「すごく立派だ」と言われ尊敬されているが、長く一緒にいたら立派な人でも「嫌だな」と思うところが半分は出てくる。それは避け難い宇宙の摂理なんですね。それを覚悟していないと、人間とは長く付き合えません。長く一緒にいたら立派な人でも「嫌だな」と思うところが半分は出てくることは、当然・当たり前・自然なこと。そういう腹づもりができていないと人間とは長く付き合えません。それ以上に人間を愛するということは、長所半分短所半分という構造を持った人間を愛するということですから、短所も愛せるという自分をつくっていかないと人間を愛する力はできません。長所は誰でも愛せますけど、短所を愛することはなかなか難しい。それには努力がいる。その努力が愛を成長させていって、熟成させ、芸術と言える段階へ到達できる。長所も短所も愛せて愛は芸術となる。**

**恋とは自然に出てくるもので自然と人を好きになってしまう。恋は自然、愛は人間が努力をしてつくっていく文化だ。恋は自然、愛は芸術。愛を芸術にまで到達させよう・成長させようと思ったら、我々はどうしたら短所を愛せるようになるかを考える必要があります。短所を愛する力をつくっていかないと人を本当に愛することはできない。人を愛するということは、その人の長所も短所も愛するということ。では、どうしたら短所を愛せるのか。愛の力を成長させて愛を芸術と言えるところまで成長させていくための努力なんですね。**

**まず確認すべきことは、短所がなかったら人間ではないということなんです。短所があってこそ人間なんだ。長所ばかりなら神様。人間は短所をなくしてはいけません。また、短所をなくす努力もさせてはならない。短所はなければならない。それはなぜか。人間の本質は理性ではなく心だ。人間らしい心は謙虚な心だ。謙虚な心をつくってくれるのは長所ではなく短所なんだ。短所がなくなれば人間は謙虚である理由がなくなってしまう。長所ばかりなら傲慢になるしかない。それが謙虚になる根拠になる。短所があるから人間らしい謙虚な心をつくることができる。だから短所はなくしてはならない、必要なものなんだ。**

**しかし「短所はあっていいんだ」と開き直ってしまってもいけません。短所をなくす努力をしてはいけないのですが、やはり短所は嫌われるもの。ならば、どういうことをしなければならないか。長所も半分ありますから、短所をなくす努力をする時間があれば、長所を伸ばす努力をセントバーナード。自分の長所を伸ばしていって、それが他人から一目置かれるほどの存在感のある能力になってくると、短所は何もしなくても人間の味に変わる=人間味。「あんなスゴイ力を持っているやつでも、こんなところがあるんだ、面白いね。人間としての親しみを感じるよね」となる。長所を伸ばさなかったら、短所は永久に単なる短所のまま。ですから、自分の長所を伸ばしていって、それが他人から一目置かれるほどになると、短所は何もしなくても人間の味に変わっていきます。短所すらも人間としての親しみを感じるものになっていく。かえって好きになってもらえる。長所を伸ばす努力は短所が人間味となるレベルまで伸ばさないと、意味がない。**

**自分の長所を伸ばし、それが他人から一目置かれるほどの存在感のある能力になり、短所は何もしなくても人間の味に変わる=人間味となる状態を“角熟”と言います。円熟に対しての角熟。円熟は真ん丸、しかし角熟は、短所も失敗も罪を犯したりと真ん丸にはならない。人間はで角ばっている。角ばった短所のある人間、角ばったまんま、そのまんま東と申しましょうか、さんまの**

**まんまで熟していくのを角熟と言います。これが、個性のある人間が成長していく目標なんです。**

**円熟は真ん丸、真ん丸になったら面白みがなくなる。丸くはなるな、角ばって生きろ、と。この角熟という生き方を人間はしなければならない。個性が熟成していった姿。とにかく、短所はなくしたらいかんのですよ。でも、嫌われる短所でもあるので、あまり出てこないように注意をセントバーナード。注意せんといかん。人に対しても「君の短所はここだから出てきたら損をするから、出てこないように注意をしようね」と言ってあげることが大事なんですよね。「短所をなくしましょう、長所ばかりになりなさい」とは言ってはいけない。なくす努力はしなくても良いけど、出てきたら嫌われてしまうから注意をしましょうということは、言わないかん。出てきたら人に迷惑を掛けてしまうから即座に謝る、ということをセントバーナードですね。**

**人の短所を発見したら責めたらいけない。それをしたら相手に完全性を求めることになるので、責めるのではなく何かその人の役に立つことをしてあげたい・助けてあげたいという気持ちになることが、血の通った温かい人間である証明になります。なんとかしてあげたい・助けてあげたい・役に立ってあげたい…これが血の通った温かい心が自分にあるということの証明。人の短所を責める人間に血の通った温かな心は微塵もない。なぜなら、人の短所を責める人間は相手に完全性を求めるから。**

**だけども、長所を伸ばす努力はある意味で完全性・完璧性・絶対を目標にすることが必要なので、厳しく注意をすることも必要になります。短所の場合はあって当然なので、ここでは厳しく言わない。伸びる長所を鍛えて、とことん伸ばす点では厳しく注意していく、叱っていくことが、さらなる成長を促すことに繋がっていきます。ここはしっかりと区別をして対応する必要があります。**

**基本的には、短所というのは誰にでもあってなくならないものですから、短所を責めることには意味がない。短所がなくなったら人間ではないのですから。必ず人間性というのは、長所短所が半分ずつという構造になっているんですよね。どういう年代になっても、どういう段階になっても長所短所は半分ずつあるという構造になっています。常に長所に集中して伸ばす努力をしていかなければなりません。そのためには厳しく接して、問題点をどんどん乗り越えて成長を考えなければなりません。どれだけ頑張っても短所は平均くらいにしか成長しない。短所を克服しようと思ってもあまり意味がない。それよりも長所をとことん伸ばすということが人生を楽しく愉快に生きていくための大事な目標であります。一時も早く自分の長所を伸ばして、他人から一目置かれるような存在感のある能力をつくることに集中的に努力する必要があります。他人から一目置かれるような存在感のある能力を持てば、本当に人生は素晴らしくなります。**

**自分の長所がなんなのかわからないという人も随分といて、また短所がなんなのかという人もいるかもしれませんが、自分というのはなかなか分かりづらいものなんですよね。だから自分を知るためには…一応、自己評価ということもあるんですけど、会社でいったら同僚からの評価、部下の評価、上司の評価、この４つを統合して初めて客観的な自分が見えてくる。自分の長所短所を知るためにも他人の自分に対する意見を聞くことも大事なことです。それと同様に親の評価、近所の評価、先生の評価など、いろんな人の評価を聞いて、自分の特徴・長所短所を知っていかなければいけません。**

**なぜ、自分の長所短所は分かりづらいのか。自分の長所短所と言っても、それは自分の中では当たり前なんですよね。だから、分からないんですね。他人が見ると、「そこは君、スゴイよ」と言っ**

**てくれると、「そうかな」と思えたりする。他人と比較して初めて自分の良いところだと分かるということになりますので、自分だけで自分を見ている分にはなかなか分かりづらい。そういう意味でも人からの自分の評価を受け入れて、再度自分のことを考えてみるのも必要になってきます。**

**人間にはどんな人間にも天分というものが与えられています。=長所になるわけですけど、天分が皆にある。天分とは、天の仕事の一端を担えるようなすごい能力のこと。天から分け与えられた力。この時代に生まれてきた人間ならば、時代の中で何か自分らしいことをして生きて死んでいくための能力は、一人ひとり与えられているんですよ。この時代に自分を送り出してくれたのは、宇宙の力ですから。両親から生まれてくるにしても、生まれ出てくる状態というのは一種、奇跡としか言いようのない精子と卵子の結びつきから生まれてきます。そこには人知を超えた天の計らいがある。だから、生まれてくる子どもには天の意志が与えられていて、この時代において「こんなことをしろよ」と独特の能力が与えられているわけです。人間には他の人には無い独特の能力が与えられている。**

**なぜそんなことが言えるのか。天分が証明するものは、顔です。顔が違うということは「俺には本人しかできない何かができる」ということを証明してるんですよ。顔の形を決めるのは、遺伝なんです。遺伝子によって顔の形は大体決まってしまうんだ。では、遺伝子とは。それは能力が物質化したもの。能力が物質化した遺伝子によって顔の形が決まって、全人類が皆違う。ということは、顔が違う=独特の才能・能力があるということを意味している。顔とは天分の証明だ。形は内容の表現であるという原理があります。機械でも新しい機能が付け加えられると、その機械の形は変わる。形を見れば、その中にどういう才能・能力があるかが分かる。形式は内容の表現であるという原理の応用なんですね。**

**顔が違う=独特の才能・能力があるということ。これはすべての子どもたちに絶大なる希望を与える重要な原理です。「俺の顔を生き抜けば、他の人間と違う独特の人間になれる」という可能性を皆持って生まれてきているということですね。顔は天分の証明である。天分のツボにハマったら笑いが止まらない人生なんですよ。左うちわどころの話ではない。両うちわで扇げます。風邪をひくくらい扇いだりしちゃう。天分のツボにハマる人生、これが最高の人生です。**

**では、天分のツボにハマる人生を生きようと思ったら、どうしたら良いのか。そのためには自分の天分を知る必要がある。天分の発見方法はあります。５つの方法を使って発見可能です。**

**天分の発見方法の第１番目は、やってみたら好きになるかどうか。言われてみるとなんだそんなことか、と言いたくなる話です。しかし、言われないとわからないものなんですよ。やってみたら好きになるかどうか、やってみて好きになったらやらないかん。才能があるから。野球を見とって好きでも、天分・才能には関係ないんですよ。野球をやってみて好きになったら天分・才能はあるけど、野球をやってみて好きにならんかったら天分・才能はないという判断をセントバーナード、せんといかん。なぜかと言ったら、能力というのは物質、遺伝子なんだ。肉体なんだ、意識ではないんだ。どれだけ意識で好きでも、才能に関係ない。肉体を動かしてやってみないと才能があるかどうかわからん。能力というのは物質。物質は遺伝子。遺伝子は肉体の一部。やってみたら好きになるかどうか。やってみて好きにならんかったら絶対やったらいかん。これは感性論哲学的独特の才能の発見方法なんですよ。これまでは能力というのは精神的なものだと言われていました。才能・能力は意識的なものだと。才能・能力は精神じゃない、意識じゃないんだ。まずは、やってみたら好きになるかどうか。**

**第２番目は、やってみたら興味・関心が湧いてくるかどうか。やってみて興味・関心が湧いてきたらやらないかん。**

**第３番目は、やってみたら得手、得意なことだと思うかどうか。得意ではないと思ったらもうやめとかないかん。**

**第４番目は、他人と一緒にやってみたら、いつも自分の方がよくできてしまうかどうか。一緒にやってみて自分が負けることがあって、何回か自分よりも素晴らしくできるやつがおったら、もうこれはやめておこうと。このことについて俺より凄い奴がおるんやからやめておこうと。他のことやろうと思わないと。誰とやってもいつも自分が勝つ場合はやらないかん。**

**最後の５番目は、真剣に取り組んだら問題意識が湧いてくるかどうか。どんなに真剣に取り組んでも何の問題意識も湧いてこない…そこには自分の才能はないんですよ。才能がある場合は、人に言われたことをやっていると、ここんとこはもっと良くなるはずだとか、問題意識が湧いてくる。問題意識が湧いてくる=自分が出てきている。そこには、自分にしかできない、自分独特のものがあるよと教えてくれているということ。**

**このように天分の発見方法は５つしかない。**

**やってみたら好きになる“ところ”。やってみたら興味・関心が湧いてくる“ところ”。やってみたら得手やな、得意なことだと思う“ところ”。やってみたら他人よりも、いつも自分の方がよくできてしまう“ところ”。やってみたら真剣に取り組んだら、問題意識が湧いてくる“ところ”。この５つの所ジョージさんが天分の発見方法なんですよ。**

**なぜ断定的なことが言えるのかと言ったら、現実の社会において成功した人間はこの５つの方法のどれかで成功しているから。これ以外にないんです。成功した人は、好きなことをやって成功したか。興味・関心があることで成功したか。得意なことで成功したか。他人よりもよくできてしまうことで成功したか。問題意識に人生をかけたか、この５つしか成功パターンがないんですよ。この天分の発見方法は、世の中の社会における実践によって証明された原理だと言える。だから、これは確かな発見方法として断定的に申し上げることができる原理なんですね。**

**とにかく、５つの天分の発見方法で自分の天分のツボを探るんです。好きか嫌いか。興味・関心が湧くか。得意なことか。他人よりもできるか。問題意識が湧いてくるか。才能を探し求めていって、一番強烈なものが命から湧いてくるもの、それが天分のツボなんです。大体、ノーベル賞をもらうような研究でも、どこから始まるかと言ったら、「皆良いと言っているけど、自分はちょっと違う・おかしいと思うな」という微妙な違和感が湧いてくるところ、問題意識が湧いてくるところから研究が始まるんですよ。**

**どんな長所で頑張っていても、必ず今自分が持っている長所の限界があって、天分・長所というのは潜在するもの。今の自分では「なんともならん。だけども、なんとかしたい」と思って頑張っていると湧き出てくるもの。そういう意味では、どんなに好きでも得手でも、常に限界にぶち当たって、けれども止めないで頑張ることで長所は伸びていくことを知っていないといけません。限界の壁に当たって諦めてしまっては、潜在する天分は出てきません。好きなことをやって壁にぶつかったらやめてはだめ。問題や悩みにぶつかってもやめないことが、長所を伸ばす努力の仕方であります。**

**とにかく、長所を伸ばしていけば、必ず短所は気にされなくなり、最終的には短所は人間の味となる、人間味に変わる。「長所練磨の角熟人生」、角熟という個性的な輝きが命から出てくることになります。ぜひそういう生き方を志してもらいたいと。早く「これにかけては自分は大した者」「このことにかけてはあいつはスゴイ」と言われる人間になることを目指してもらいたいです。他人から一目置かれる能力を早くつくる。そのために長所に着目してとことん伸ばすことが、人生を面白く愉快に楽しく生き甲斐を持って生きていくために最も大事な努力の仕方であります。**

**短所を生かす方法はなんなのか。隠すのでもなく、出てこないように注意するわけでもなく、「俺のダメなところはここなんだ」とわざと短所をさらけ出して、人に助けてもらう。そして、助けてくれた人に感謝して尊敬するという生き方を覚えることが、最も短所を生かせて、輝かせることになるんですね。そうすると、相手はますますこちらのために頑張ってくれる。これは昔から「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という言葉。社会的な地位が上がっていく、また匠と言われるような熟練者となっていくと、普通は威張り始めるんです。それでも威張るのではなく、部下に仕事をしてもらわないとなりませんから、上司は短所や欠点や不得手をさらけ出す。そこを部下に補ってもらう。そのために仕事をさせて与えて、助けてもらう。そして、相手を褒め称える。そうすると、部下は短所をさらけ出した上司のことをますます尊敬するようになり、ますます上司のために働くようになります。これが、短所をさらけ出して部下に仕事をさせる上司のリーダーシップなんですね。ついつい、地位が上がっていくと上司としては部下のすることが頼りなく見えて、「もうちょっとしっかりせんか」と言いたくなってくる。上司・先輩が部下・後輩を頼りなく見えるのは当然なんですよね。今、上司・先輩だと言っている人も平社員の頃は頼りなかった。上司・先輩の立場から部下・後輩を見て、頼りない・任せられないとするのは、上司・先輩の考え違い。部下・後輩も長所のあるところで使ってあげて、長所を伸ばしてあげる判断をする必要があるということです。そのためには積極的に上司・先輩が自分の短所や欠点や不得手をさらけ出して、代わりに仕事を行ってくれる部下・後輩に任せる。そして、相手を褒め称える。これが最高に短所を生かす仕事の仕方なんですね。普通は短所をさらけ出したらバカにされると考えがち、現実は短所をさらけ出して自分の代わりに仕事をしてもらって、結果を褒め称えてあげれば褒められた部下は、かえって短所をさらけ出した上司を尊敬して、付いていこうと思ってくれるものなんですよね。ただ、あまりにも短所をさらけ出し過ぎるとバカにされる可能性もありますから、されないためにも上司は自分の持っている長所をとことん伸ばして、部下に評価されるものをつくっておかないといけません。長所をつくっておくのも大事な生き方です。とにかく、短所を生かす生き方を覚えなければならない。短所の特徴を理解していけば、短所は必要なんだと分かってきます。**

**短所はあって良いと申しましたが、短所があるだけでは動物なんですね。人間になるためには「俺の短所はここだ、長所はここだ」と自覚が無いと謙虚な心はつくれません。短所の自覚を持たせることが大事になります。人間らしい謙虚な心を持つための大事な原理になります。しかし、会社の中には非常に傲慢不遜な人間もいて、短所があるのに短所を知らないで部下に接して、嫌われる上司が何人かいるというのは、どんな組織でもあることです。部下を叱って、叱り飛ばして自分は偉そうな顔をしているという上司もいる。組織内の人間関係がうまくいかないという場合も多々あります。そういうことをなくすために会社全体でどうすべきかと言うと、紙を配って半分に折り、右半分に私の長所、左半分に私の短所と書いて、それぞれを３つずつ書かせる。皆に書かせて、皆で回覧する。お互いに長所短所を知り合いながら関わる。そういうことをしていくと、威張り散らしていた上司も自分の短所を理解して、部下に対する横柄な言動も直っていく。短所の自覚を持たせることが人間らしい心を持った人間をつくる大事な方法になるんですね。短所の自覚が必要だということを忘れてはいけません。**

**これは人間は完全ではないという、不完全性の自覚と言われるものです。不完全性の自覚は短所がなければ出てこないもの。不完全性の自覚こそ、人間が人間として生きていくための最も大事な根本原理だと言われます。自分が不完全だと自覚できるのは人間だけなんです。神にも動物にも不完全性の自覚は持てない。神が持つならば、完全性の自覚でなければならない。神が不完全性の自覚を持ってしまったら、神でなしになってしまいます。そういう訳にはいかない。動物は人間同様不完全な存在ではありますが、完全なものを意識することができません。自分が完全ではないと知りません。人間は理性という能力を持っていて、完全なもの=神を意識することができますので、自分は神ではない、完全ではないという意識を持つことができる。そういう意味で不完全性の自覚は人間にしか持てないもの。不完全性の自覚こそ、人間が本物の人間として生きていく原理だと言うことができます。人間にしか持てないものを持たずして、どうして人間だと言えるのか…そういう根拠があるわけであります。不完全性の自覚は短所がなければ出てこないものだと、理解してもらいたいと思います。**

**時間論的な観点から愛の本質を考えていくと、愛は短所の存在を認めて、許す力である。よく愛とは許すことと言われますが、何を許すのか。基本的には、愛とは相手の持っている短所を許すことが、その人をその人として本当に愛することの証明になるんですね。大事な原理であります。短所を認めず、許さずにしてどうして人間として生きていけるか、愛せようか。愛とは短所を許し、認めて補い、長所と関わる力である。これが時間論的に考えた場合の愛の原理であります。すなわち不完全を許し、認めて補いながら生きるということになりますので、これを「不完全を生きる」と言います。人間は不完全を生きるという生き方をしなければならないんだ。不完全で良いんだ。長所はとことん伸ばして、どんどん成長させていかないといけないですが、短所の存在をなくそうとしない…つまり不完全で良いということ。短所は常に半分なければならない。**

**これらを心得て仕事をしてもらいたい。どこか人間だから物足りないところもあるとは思いますが、仕事の上でもあまり自分を主張し過ぎないで、人から注意されても素直に認めて、それに対応して自分を修正していくという謙虚な態度を持つべきです。**

**昔、三菱自動車が消費者からいろいろクレームが来た時、三菱自動車は「自分たちの技術は完璧だ。全然問題はない。消費者の使い方に問題がある」とクレームを突っぱねた。その結果として轟々たる批判が国民から寄せられて、一時、三菱自動車は倒産の危機に瀕しました。一点翻って、技術の方が消費者がどんな使い方をしようとも大丈夫な製品をつくることを心掛けていかないといけない改め、技術者の方が反省して謝った。そこから三菱自動車は蘇った。そういう意味で自分にどれだけ自信があっても、何か批判を受けたらそれを快く引き受けて、自分の成長の糧にしていくことがプロなんですね。成長意欲があるというのが仕事においては大事な課題であります。成長意欲があって、初めて相手から学ぼうという気持ちも出てきます。ぜひ成長意欲を持ち続けて、人間は不完全だから常に学んで成長していくということが必要だ。批判されてもそれを突っぱねないで受け入れて自分の成長の糧にしていく。そういう生き方をぜひやってもらいたいと思います。**

**今日は愛とはなんなのかということを話しましたけど、結論的には愛は、他者と共に生きる力であり、短所を許し補い、長所と関わる力である。不完全を生きる、矛盾を生きる力が愛なんだ。最終的に結論として申し上げておきたいと思います。どうもありがとうございました。**